野宮

ののみや

野宮に木の葉を手向けたシテの里の女は、あたりの荒れ果てた光景を語りつつ昔を偲ぶのであった。

作者　不明。あるいは金春禅竹か。『自家伝抄』（十六世紀初頭成る）は、世阿弥作能の項に「野宮　但異作」とある一方、金春禅竹作能の項にも「野宮　但異作」とある。この「異作」の意味は未詳。なお、寛正六年（四六五）二月二十八日、将軍院参の折の演能に「野々宮」の曲名がみえる（『親元日記』）。

内容　晩秋、蕭条とした洛西嵯峨野の野宮の旧跡にあらわれた一人の女は、九月七日の今日は光源氏がここに六条の御息所を訪ねた日と僧に言い、御息所と源氏との間のこと、御息所が姫宮の斎宮とともに伊勢へ下向したことを語り、自らを御息所と名のって、夕方の黒木の鳥居の陰に姿を消す。後場、車に乗ってあらわれた御息所は、賀茂の祭の折の「車争い」の屈辱を述べ、妄執を晴らしたまえと願う。源氏の来訪を回想しての舞の後、御息所はふたたび車に乗って出て行ったが、はたして火宅（迷界）を出たのであろうか。

人物

ワキ　旅僧　角帽子・袈裟・無地熨斗目

シテ　女　面＝若女（深井）・唐織

アイ　所の者　長上下

後シテ　御息所　面＝若女（深井）・長絹・緋大口

底本　『寛永卯月本』（観世流）（鴻山文庫目録五20）

備考　太鼓なし。五流にある。

晩秋の野宮の夕景は美しく寂しい。それは六条の御息所の心情と重ね合わされている。簡素な黒木の鳥居・小柴垣の作り物は、風情を添える。

作者を金春禅竹かとしたのは、その詞章や表現の細部に禅竹の特徴を認める伊藤正義氏の説による（新潮日本古典集成『謡曲集下』の各曲解題「野宮」）。

鬘物のなかで、太鼓の入らない（序ノ舞）に続いて（破ノ舞）が舞われるのは本曲と「落葉」のみである。

一中国古代の都の名。これを京都の別称として用いていた。参考「洛陽トハ、タダ東ノ京トイフ義ナリ。西ヲ長安トイヒ、東ヲ洛陽トイフ。ソノ制前後アレドモ、今本朝ニハ両都一郡ナル故ニ、共ニ呼ンデ同ジク京師ノ名トスルカ」（塵添壒嚢鈔・十六）。二山城国葛野郡嵯峨のあたりの称。秋草や虫の名所。歌枕。参考「野は、嵯峨野さらなり」（枕草子）。三伊勢の斎宮になる皇女が、潔斎のため一年間籠もる宮。西嵯峨の有栖川にあった。参考「夕月夜、柴垣、黒木の鳥居、野の宮、松虫、浅茅が原、暁の別れ、虫の声、秋の草さまざま、鈴鹿川、伊勢まで、八十瀬の波、これらは、野の宮、伊勢などに付くべし」（源氏小鏡上・賢木）。四順縁に対する言葉で、かりそめの通りすがりの縁。五車屋本及び下掛三流は「この旧跡に来て見れば」。六皮を削りとらない丸木のままで作られた鳥居。「小柴垣」とともに「源氏物語」賢木にみえる。→三〇二ページ注四。七柴を編んで作った丈の低い垣。八車屋本及び下掛三流は「こはそも」より「よしよし」までなし。九伊勢の神は、神仏の分け隔てをせず、僧も神社に参詣できる、の意。一〇「法の教への道」は仏教の意。「（法の教への）道直に」「道直に（ここに尋ねて）」と上下に掛かる。一一「（尋ねて）見る」と掛詞。

▼シテが右手に数珠を持って登場する演出もある。

野宮

後見が柴垣のついた鳥居の作り物（→三〇五ページ図）を正面先に置く。「名ノリ笛」とともに旅僧姿のワキ登場。常座に立って、名ノリを述べた後、中央へ出て、作り物へ向いて サシ 以下を謡い、脇座に着座する。

〔名ノリ笛〕

ワキ「名ノリ」これは諸国一見の僧にて候。われこの程は都に候ひて、洛陽の名所旧跡残りなく一見仕りて候。また秋も末になり候へば、嵯峨野の方ゆかしく候ふ間、立越え一見せばやと存じ候。これなる森を人に尋ねて候へば、野の宮の旧跡とかや申し候ふほどに、逆縁ながら一見せばやと思ひ候。（中央へ出る）

ワキ〈サシ〉われこの森に来て見れば、黒木の鳥居小柴垣、昔に変らぬ有様なり（着座して合掌）。こはそも何といひたることやらん、よしよしかかる時節に参り合ひて拝み申すぞありがたき。

ワキ〈下歌〉伊勢の神垣隔てなく、法の教への道直に、ここに尋ねて宮所、心も澄める夕べかな、心も澄める夕べかな。

（立って脇座へ行き着座する）

諸国をめぐり歩く旅の僧が、嵯峨野の野宮の旧跡を訪れる。

旅僧「わたくしは諸国をめぐり歩く僧であります。ちかごろは都におりまして、洛中の名所旧跡を残らず一見いたしました。今は秋も末になりましたので、嵯峨野のほうに心ひかれますゆえ、出かけて行き見物したいと思います。ここの森を人に尋ねましたところ、野宮の旧跡とか申しますので、通りすがりの縁ながら参詣したいと思います。

旅僧〈わたくしがこの森に来て見ると、黒木の鳥居や小柴垣は、話に聞いている昔と変わらぬ有様である。これはいったいどうしたことなのだろう。それはそれとして、こういう折に参りあわせて、拝み申すのはありがたいことだ。

旅僧〈伊勢の神は神仏の隔てをなさらず、仏の教えはすなおに広がり 僧の身で道をまっすぐに歩いて、ここに尋ねてみれば このお宮は、空気の澄みきった夕方で わが心も澄むことだ、空気が澄んでいて わが心も澄む夕方であること。

晩秋の野宮に一人の女が登場し、さびしい秋の情景を述べ、わが身の上を嘆く。

女〈花に馴れ親しんできた野宮、花を見なれて過ごしてきた野宮の、秋より後はどうなることであろう。

一「花」に光源氏、「野の宮」に六条御息所、「秋」に「飽き」の意を含ませて、源氏の愛を失った御息所のさびしさを暗示した表現。二 参考 古の秋さへ今の心地して濡れにし袖に露ぞおき添ふ（源氏物語・御法）。なお、車屋本及び金春・喜多の二流は「なほしをれゆく」。三「身をくだく心の色は夕まぐれ千種の花にあらはれにけり（千五百番歌合 藤原季能）に基づく。「身」「くだく」は、「露」の縁語。なお、金春流は「身をくだくなり」。四「色」「花」「衰ふ」は縁語。五 源氏が心を移した女性たちを重ねる。六・車屋本及び下掛三流は「あらはれて」。七・金剛流は「ならひかや」。八・車屋本及び下掛三流は「年々に」。九 この「上歌」は閑吟集に採られている。一〇 参考 木枯の吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなさのころもへにけり（源氏物語・賢木）。一一「吹きて」の意を含む。一二「（木枯…）身にしむ」「身にしむ（色）」と上下に掛かる。参考 吹き来れば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな（古今和歌六帖・一 読人しらず）。「白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く（新古今集・恋五 藤原定家）。一三 心の状態が悲しみにうちひしがれて人心地もないようになって、の意。「心の色」を受けた表現。「かへり」「古」は縁語。一四「（何と）偲ぶ」と掛詞。「忍ぶの草衣」は、忍ぶ草の模様を摺り出した粗末な衣

次第 の囃子で、里の女の姿のシテ登、右手に束、左手に木の葉を持って登場 常座に立ち、鏡板へ向いて、次第 を謡い、続いて正面を向いて、サシ 以下を謡う。

〔次 第〕

〽次第 花に馴れ来し野の宮の、花に馴れ来し野の宮の、秋より後はいかならん。

〽サシ 折しもあれ物のさびしき秋暮れて、なほしをりゆく袖の露、身をくだくなる夕まぐれ、心の色はおのづから、千草の花に移ろひて、衰ふる身のならひかな。

〽下歌 人こそ知らね今日ごとに、昔の跡に立ち帰り、

〽上歌 野の宮の、森の木枯秋更けて、森の木枯秋更けて、身にしむ色の消えかへり、思へば古を、何と忍ぶの草衣、来てしもあらぬ仮の世に（右へ向いて少し出る）、行き帰るこそ恨みなれ、行き帰るこそ恨みなれ（正面を向く）。

ワキは着座のままシテに問いかけて問答となる。地謡となるとシテは鳥居へ木の葉を手向け、常座にもどる。

ワキ「われこの森の蔭に居て古を思ひ、心を澄ます折節、いとなまめける女性、人忽然と来り給ふは、いかなる人にて

女〽折も折ものさびしい秋は暮れて、いよいよ 袖は露と涙とで濡れしおれゆき、身をくだくばかりに悲しい夕暮れ、わたくしの心は おのずから、千草の花のしおれゆくように色あせて……。これが衰えゆく人の身のさだめなのだ。

女〽人こそ知らぬことながら 毎年この日のくるたびに、この旧跡に立ちもどって来て 涙するわたくし。

女〽野宮の、森では 木枯が吹いて秋も深く、木枯が吹きすさんで 秋も末となり、風は身にしみ 心は悲しみに消えんばかり。思えば 昔のことを、何と偲ぼうぞ 偲ぶよすがとてないここ野宮。帰って来てもかいのないこの仮の世に、もどって来てはまたあの世に帰るとは 恨めしいこと、この世とあの世とを往来するわが身の執念は まことに恨めしいことだ。

旅の僧は女に声をかけ、光源氏が六条御息所をここに訪れたのが九月七日の今日であったことを知る。女は昔を偲びつつ、荒れ果てた野宮の光景を述べる。

旅僧「わたくしがこの森の陰にすわっていて 昔のことを思い、心を澄ましているところに、たいそうあでやかな女の方が一人 突然においでになった あなたは、どういうお方でいらっしゃいますか。

どういう者かとお尋ねになる、そのあ

「着て」に音の通ずる「来て」の序。一五 この世。「刈り」に音が通じて「草」と縁語。また、「雁」に音が通じて「行き帰る」と縁語。

▼ワキが立って問答する演出もある。一六 歴代天皇の即位ごとに占いによって選ばれ、伊勢神宮に奉仕した未婚の皇女。斎王ともいった。崇神天皇の時代に始まり、後醍醐天皇の時代に廃絶した。一七 源氏が六条御息所を野宮に訪ねた日。参考「野宮に参ぎでたまふ。九月七日ばかりなればー」(源氏物語・賢木)。一八 車屋本及び宝生流と下掛三流は「御神事をなしさむらふところに」。一九 斎宮が仏教を忌むことによるか。参考「凡ソ忌詞、内七言、仏ヲ中子ト称シ、経ヲ染紙ト称シ、塔ヲアララギト称シ、寺ヲ瓦フキト称シ、僧ヲ髪長ト称シ、尼ヲ女髪長と称シ、斎ヲカタシキト称ス」(延喜式・五・斎宮)。二〇「(身の行末も)定めなき」「定めなき(世)」と上下に掛かる。二一 以下「榊をいささか折りて持ちたまへりけるをさし入れて、変らぬ色をしるべにてこそ、斎垣も越えはべりにけれ。さも心憂くと聞こえたまへば、神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさかきぞ」(源氏物語・賢木)に基づく。二三 神社の垣。参考「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし今は我が身の惜しけくもなし」(拾遺集・恋四 柿本人麿)。二四 東宮(皇太子)や親王の妃の敬称。本曲では六条御息所をさす。二五→

ましますぞ。

シテ「いかなる者ぞと問はせ給ふ、そなたをこそ問ひ参らすべけれ。これは古斎宮に立たせ給ひし人の、仮に移りまして野の宮なり。しかれどもその後はこの事絶えぬれども、長月七日の今日はまた、昔を思ふ年々に、人こそ知らぬ宮所を清め、御神事をなすところに、行方も知らぬ御事なるが、来り給ふは憚りあり、とくとく帰り給へとよ(ワキへ一歩出る)。

ワキ「いやいやこれは苦しからぬ、身の行末も定めなき、世を捨て人の数なるべし。さてさてここは古りにし跡を今日ごとに、昔を思ひ給ふ、謂れはいかなる事やらん。

シテ「光源氏この所に詣で給ひしは、長月七日の日今日に当たれり。その時いささか持ち給ひし榊の枝を、斎垣の内に挿し置き給へば、御息所とりあへず、神垣は、しるしの杉もなきものを、「いかにまがへて折れる榊ぞと、詠み給ひしも今日ぞかし。

ワキ「げに面白き言の葉の、今持ち給ふ榊の枝も、昔に変らなたをこそ どなたかとお尋ねいたさねばなりません。ここは 昔斎宮にお立ちになられた方が、仮にお移りになる野宮である。しかしながら その後この斎宮のことは絶えてしまったのだけれども、九月七日の今日という日は やはり、昔を偲ぶ日なので 毎年毎年、人は知らぬことながら このお宮を掃き清め、お祀り申しあげている そのようなところに、どこのだれともわからぬお方が、おいでなさるのは さしさわりがある、さあさあ早くお帰りなさいませ。

弦間「いやいや わたくしはさしつかえのない、者 身の行く末も定めない、世捨人の一人といってよいであろう。さてさてここはすっかり時がたってしまった旧跡なのに 毎年今日という日のめぐりくるたびに、昔をお偲びなさるという、その理由はどういうことなのかしら。

女「光源氏がこの所においでになったのは、九月七日の日 すなわち今日に当たっている。その時少しばかり折ってお持ちになっていた榊の枝を、社の垣の内に挿してお置きになったので、六条の御息所がすぐその時に、「神垣は、しるしの杉もなきものを、「いかにまがへて折れる榊ぞ」と、お詠みになったのだが それも今日のことなのである。

三〇六ページ注四。三五　和歌。「葉」は「榊」の縁語。なお、金剛流は「言の葉かな」。

一「賢しきことといふ」の意を含む。二　たけの低い茅萱の生えた荒れ野。→注五。三　この「上歌」は『閑吟集』に採られている。

▼木の葉を置いて合掌する演出もある。

四　以下「ものはかなげなる小柴垣を大垣にて、板屋どもあたりあたりいとかりそめなり。黒木の鳥居どもは、さすがに神々しく見わたされて、わづらはしきけしきなるに、神官・巫の者ども、ここかしこにうちしはぶきて、おのがどちものうち言ひたるけはひなども、ほかにはさま変りて見ゆ。火焼屋かすかに光りて、人げ少なくしめじめとして、ここにもの思はしき人の、月日を隔てたまへらむほどを思しやるに、いといみじうあはれに心苦し」（源氏物語・賢木）に基づく。五「刈り」に音が通じ、「柴」の縁語。六　神膳を整えるための火を消さずに保っておく所。「（今も）火焼くや」の意を含む。七「中ニ誠アレバ、外ニアラハル」（大学・伝之六）や「諸ニ内ニアレバ、必ズ諸外ニアラハル」（孟子・告子章句下）などを、原意をやや転じて言いならわした成句。「熊野」「松風」に同様の表現がある。参考「思在内、色露外」（嵯峨清涼寺地蔵院縁起）。一「しのぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ぬ色よなう。

ワキ　「昔に変らぬ色ぞとは、榊のみこそ常磐の蔭の、

シテ　「森の下道秋暮れて、

ツレ　「紅葉かつ散り、

ワキ　「浅茅が原も（ワキへ一歩出る）、

地謡　「上歌　末枯の、草葉に荒るる野の宮の、草葉に荒るる野の宮の（鳥居の前へ行き、膝をついて木の葉を置く）、跡なつかしきここにしも（立つ）、その長月の七日の日も、今日に廻り来にけり（まわって中央でワキへ向く）、ものはかなしや小柴垣（作り物を見まわす）、いとかりそめの御住まひ（鳥居の内を見込む）、今も火焼屋のかすかなる（右のほうを見あげる）、光はわが思ひ内にある、色や外に見えつらん、あらさびし宮所、あらさびしこの宮所（常座にもどる）。

ワキのせりふがあって、シテは中央へ行き着座する。クリ　サシ　クセ　と着座のままである。

ワキ　「なほなほ御息所の謂れねんごろに御物語り候へ。

地謡　「クリ　そもそもこの御息所と申すは、桐壺の帝の御

旅僧　「まことに趣のある歌であるが、それにつけて、今お持ちになっている榊の枝も、昔に変わらぬ色をしていることよ。

女　「昔に変わらぬ色とは　気のきいたお言葉、榊だけは　常に緑の陰をつくっているが、

旅僧　「森の下道に秋は暮れて、

女　「紅葉が色づく一方では散り、

旅僧　「浅茅が原も、

地謡　「草の葉先が枯れ、荒れ果てている野宮、草葉も枯れて荒れている野宮の、昔なつかしいこの旧跡に、あの九月七日の日がまた、今日めぐってきたのである。なんとなく頼りないことだ　小柴垣、まったくの仮のお住まいで、今も昔のように火を燃やしている火焼屋から漏れるかすかな、光は　わたくしの内心の思いが、おもてにあらわれて見えたのと　似ているかのよう。ああさびしいお宮である、このお宮は　なんともさびしいこと。

女は、なおも六条の御息所について語る。

旅僧　「なおなお御息所のことを　心をこめてお話しください。

地謡　「そもそもこの御息所と申すお方は、桐壺の帝の御弟の、前の東宮と申しあげたお方と結ばれ、世に時めいて　まことにはなやかな有様で、妹背の愛情も浅くなかったのに、

ふと人の問ふまで」（拾遺集・恋一平兼盛）。「心内に動き、言葉外にあらはれずといふことなし」（新古今集・仮名序）。「情中ニ動キテ、言外ニアラハル」（本朝文粋・十一・讃法華経廿八品和歌序　藤原有国）。なお、「思ひ」は「火」の音を含むので、「光」の縁語。

▼中央へ出て床几に腰をかける演出もある。

八・車屋本及び金春・金剛の二流は、このワキのせりふなし。九前の東宮。一〇・車屋本及び下掛三流は「申し奉りしに」。一一会うものは必ず離れる。人生の無常を表わす語。参考「沙羅双樹ノ風ノ声、会者定離ヲ調ラブナリ、祇園ノ鐘モ今更ニ、諸行無常ト響カセリ」（涅槃和讃）。「一切ノモロモロノ世間ニ生ケル者ハ皆死ニ帰ス。盛ンナル者ハ必ズ衰フルコトアリ、合ヒ会フハ別離アリ。法トシテ常ナル者アルコトナシ」（六道講式）。一二「驚く」は「夢」の縁語。一三涙の意を含む。「光」の序。一四源氏が御息所に対して薄情なままであってよいとは、の意だが、『源氏物語』の本文では、御息所が自分（源氏）を「つらきもの」と思うのは、の意。参考いとど御心の暇となければ、つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく、人聞き情なくやと思しおこして、野宮に参うでたまふ（源氏物語・賢木）。一五以下は「るけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花みなおと

弟、前坊と申し奉りしが、時めく花の色香まで、妹背の心浅からざりしに、

シテ　〽〈サシ〉会者定離のならひもとよりも、

地謡　〽驚くべしや夢の世と、程なく遅れ給ひけり。

シテ　〽さてしもあらぬ身の露の、

地謡　〽光源氏のわりなくも、忍び忍びに行き通ふ、

シテ　〽心の末のなどやらん、

地謡　〽また絶え絶えの中なりしに、

地謡　〽〈クセ〉つらきものには、さすがに思ひ果て給はず、はるけき野の宮に、分け入り給ふ御心、いとものあはれなりけりや、秋の花皆衰へて、虫の声もかれがれに、松吹く風の響きまでも、さびしき道すがら、秋の悲しみも果なし。かくて君ここに、詣でさせ給ひつつ、情をかけてさまざまの、言葉の露もいろいろの、御心の内ぞあはれなる。

シテ　〽その後桂の御祓ひ、

地謡　〽白木綿かけて川波の、身は浮草のよるべなき、心の水に誘はれて、行方も鈴鹿川、八十瀬の波に濡れ濡れず、伊

女　〽会う者は必ず離れるというのは　もとより世のならわし、

地謡（女）〽この世は夢の世と　いまさら悟らねばならぬことであろうか、まもなく背の君に先立たれておしまいになった。

女　〽いつまでそのままでもいられぬ身に、

地謡（女）〽光源氏が　むたいにも、忍び忍びに通ってゆく、

女　〽その源氏の心が　その後どうしたわけか変わって、

地謡（女）〽またとだえがちの仲となったのだが、

地謡（女）〽それでも　御息所に対して薄情なままでよいとは、さすがに思い切っておしまいにならず、はるかな野宮に、踏み分けておいでになるお心は、たいそうあわれなことであったこと。秋の花はみな咲き終えて枯れ、虫の声も絶え絶えになり、松吹く風の響きまでも、さびしい道すがら、秋の悲しみも　限りなく身にしみる。こうして源氏の君は　ここ野宮に、出かけておいでになって、御息所になさけをかけて　さまざまの、言葉を　いろいろとお交わしになる、おふたりのお心の内は　まことにあわれ深いことである。

女　〽その後　桂川で（斎宮の伊勢下向前の）お祓いがあり、

地謡（女）〽白い幣をかけた榊は流され　川波に漂って、わが身は　浮草のように頼りど

ろへつつ、浅茅が原もかれがれなる虫の音に、松風すごく吹きあはせて、そのこととも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり」（源氏物語・賢木）に基づく。

六「晋葉」の「葉」の縁語。七「十六日、桂川にて御祓したまふ」（源氏物語・賢木）。八「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」（古今集・雑下　小野小町）に基づく。

▼流儀によっては、「浮草のよるべなき」で立ち、地謡に合わせて舞い、「恨みなりけれ」で中央に着座する。

九「鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ」（源氏物語・賢木。源氏の歌。ふりすてて今日は行くとも鈴鹿川八十瀬の波に袖はぬれじゃ」に対する御息所の返歌）に基づく。歌意は、鈴鹿川の瀬々の波にわたくしの袖が濡れるか濡れないかなどと、だれがはるばる伊勢のわたくしまで関心を寄せてくださることだろうか。

一「（晋の）葉は」と「母（添ひ行く）」と上下に掛かる。

二 伊勢国多気郡にあった斎宮の御所。「多気」は「竹」に音が通じ、「子」の縁語。

▼「恨みなりけれ」でシオリをする演出もある。

三 山城国の歌枕「羽束師の森」を折り入れて、「漏りてや」に続けた表現。

四「よそに知られまし」と頭韻。

勢まで誰か思はんの、言の葉は添ひ行く事も、ためしなきものを親と子の、多気の都路に赴きし、心こそ恨みなりけれ。

掛合いの謡の後、一夕暮の秋の風」でシテは立ち、中入する。

地謡〈ロンギ〉げにや謂れを聞くからに、ただ人ならぬ御気色、その名を名のり給へや。

シテ〈名のりても、かひなき身とてはづかしの、漏りてやよそに知られまし、よしさらばその名も、亡き身ぞと弔はせ給へや。

地謡〈亡き身と聞けば不思議やな、さてはこの世をはかなくも、

シテ〈去りて久しき跡の名の、

地謡〈御息所は、

シテ〈われなりと（ワキへ向く）、

地謡〈夕暮の秋の風（立つ）、森の木の間の夕月夜（右のほうを見まわす）、影かすかなる木の下の、黒木の、鳥居の二柱に（正面へ少し出る）、立ち隠れて失せにけり、跡立ち隠れ失せ

ころがないと、揺れ動く心のままに、その行く先も伊勢の国 その途中で源氏へ『鈴鹿川、八十瀬の波に濡れ濡れず、伊勢まで誰か思ひおこせん』の、歌を贈って 母が斎宮に連れ添って行くことも、前例がないのに 親と子とが、斎宮の御所多気の都へ出かけて行ったのだが、その御息所の心の内こそ まことに恨み深いものがあった。

僧に尋ねられて、女は、自分が御息所であると告げて、鳥居の陰に消え失せる。

地謡（旅僧）〈なるほど いわれを聞いただけでも、ふつうの人とは違ったご様子、どうかお名前をお名のりなさいませ。

女〈名のっても、そのかいのない身で 恥ずかしいことながら、その名もいつしか漏れて 世に知られることもあろうか。しかたがないそれでは その名も、ないこの世にもはや亡い身と思って お弔いくださいませ。

地謡（旅僧）〈この世に亡い身と聞けば ふしぎなこと。ではこの世をはかなくも……。

女〈そのとおり この世を去って年久しく その名のみ今に残る、

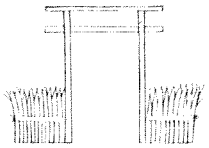
地謡（女）〈御息所とは、

女〈このわたくしであると、

地謡〈言って 夕暮れの秋の風の吹く、森の木の間を漏れる夕月の、光もかすかな

五「(その名も)無き」と掛詞。
六「(跡の名の)み」と掛かる。
七「(われなりと)言ふ」と掛詞。
八「(木の下の)黒き」と掛詞。
九「柱」の縁語。

一〇* 以下のアイのせりふは、山本東本による。
一一 なんとなくさびれて。
一二* 以下のアイと応対するワキのせりふは、下掛宝生流による。
一三 相手の言葉に対して、肯定の意で応ずる言葉。そのとおり。


鳥　居
（舞歌集大全）

一四 たいへん結構なことです。「ちかごろ」は、近ごろにおいて珍しいこと、甚だありがたいこと、の意に用いられる。
一五 精進(身を清め心を慎むこと)のために籠もる家屋。
一六 桂川でお祓いをなさって、の意。

野　宮

にけり（数歩下がり、静かに中入する）。

アイの所の者が出て常座に立ち、今日は野宮の御神事だから参ろうと言って、角へ出てワキの僧の姿を見つける。アイは中央に着座して、光源氏が野宮へ御息所を訪ねた時のことを語り、御息所への供養を勧めて狂言座に退く。

一〇* アイ「（常座で）かやうに候ふ者は、このあたりに住まひする者にて候。今日は野の宮の御神事にて候ふ間、急いで参らばやと存ずる。（前へ進みながら）いや、いつもにぎやかにござあるが、今日は参る人もなく、物さびて候ふよ。（角でワキの僧を見つけて）いや、これに見馴れ申さぬお僧の御座候ふが、いづくよりいづかたへ御通り候へば、これにはやすらうて御座候ふぞ。

一一* ワキ「これは一所不住の僧にて候。御身はこのあたりの人にてわたり候ふか。

アイ「なかなか、このあたりの者にて候。

ワキ「さやうに候はば、まづ近う御入り候へ、尋ねたき事の候。

アイ「心得申して候。（中央に着座し）さてお尋ねありたきとは、いかやうなる御用にて候ふぞ。

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども、この野の宮の謂れ、御息所の御事につき、さまざま子細あるべし、ご存じにおいては語つて御聞かせ候へ。

アイ「これは思ひも寄らぬ事をお尋ね候ふものかな。われらもこのあたりに住まひいたせども、さやうの事詳しくは存ぜず候、さりながら、およそ承り及びたる通り、物語り申さうずるにて候。

ワキ「ちかごろにて候。

アイ「（正面を向き）〈語り〉まづこの野の宮と申すは、いにしへ伊勢斎宮に立ち給ふ御方の、仮に移りまします、御精進屋にてござあると申す。すなはちこの所にて御身を清められ、それより桂の祓ひに合

木の下に、黒々と立つ黒木の、鳥居の二本の柱の陰に、隠れて消えてしまった、姿は隠れて見えなくなってしまった。

この所の者が出て、旅の僧に対して御息所のことを語り、御息所を弔うように勧めて退場する。（現代語訳は省略）

一 様子。
二「すさむ(下二段活用)」は避けて遠ざかること。御息所は源氏にうとんぜられ申したので、すなわち、源氏が御息所をうとんじて遠ざかりなさったので、の意。
三 心をこめて慰問なさろうとて。
四 歌意は、この宮の神垣には、三輪の神ではないから、目じるしになる杉もないのに、どう間違えて、榊の枝をお折りになったのですか(お招きもしていないのに、どうしてここへおいでになったのですか)。「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」(古今集・雑下読人しらず)に基づく。
五『源氏物語』賢木では、二句目「あたりと思へば」。歌意は、神に仕える少女の挿頭だと思えば、榊の葉の香りがなつかしいので、探し求めて折って来たのである。
六 源氏の「あかつきの別れはいつも露けきをこは世に知らぬ秋の空かな」と、御息所の返歌「おほかたの秋の別れもかなしきに鳴く音な添へそ野辺の松虫」(源氏物語・賢木)。
七 源氏物語。
八 上流の方々の間でいろいろと論議なさることだから、われわれのような下々の者には、詳しいことはわからない、の意。
九 驚き入ったことだ。言葉で言い表わせないほど甚だしいこと、の意。
一〇 生霊となって葵の上を悩ましたことなどから、このように言った。

はせられ、伊勢へ御下向あつて、多気の都に住み給ふ。さるほどにいにしへ前坊の御姫宮、斎宮に御立ちあらうずるとて、この野の宮へ移らせ給ひたると申す。また御息所、御移りなされたる様体は、前坊に後れ給ひてより、光源氏、御息所を御寵愛なされ、御契りも浅からずござありたるが、中ごろすさめ参らせられしに、女性のはかなさは、かく御心変りゆきたる上は、所詮、都にござあつても詮なしとて、御姫宮ともろともに、伊勢へ御下向あらうずるとて、この野の宮へ移らせ給ひたると申す。源氏このよしきこしめし、御息所の御事は、さすがにつらき事にはおぼしめし果て給はぬ御方なれば、いま一度御対面あつて、彼の御心中をもとむらひ給はうずるとて、長月七日とやらんに、源氏この所へ詣でさせ給ひけれども、さすがに御精進屋の御事なれば、斎垣の内へ叶ひ申さず、その時源氏の御手に、榊の枝をいささか折りて持たせられ、斎垣の内へ挿し置き給へば、御息所御覧じてとりあへず、神垣は、しるしの杉もなきものを、いかにまがへて折れる榊ぞと、かやうに詠ませられければ、源氏の御返歌に、乙女子が、かざしと思へば榊葉の、香をなつかしみ留めてこそ折れと、かやうにあそばされ、また暁御帰りの時も、たがひに御歌などを詠ませられ、源氏御心強くも御帰りありたると申す。されば御息所も、御姫宮ともろともに、伊勢へ御下向ありたるとは申せども、源氏などの御事は、上つ方に御沙汰ある御事なれば、詳しき子細は存ぜず候。

アイ「(ワキに向き)まづわれらの承りたるはかくのごとくにて候ふが、ただいまのお尋ね不審に存じ候。
ワキ「ねんごろに御物語り候ふものかな。尋ね申すも余の儀にあらず、御身以前に、いづくともなく女性一人来られ候ふほどに、すなはち言葉を交して候へば、御息所の御事、ただいま御物語のごとくねんごろに語り、御息所はわれなりと言ひもあへず、鳥居のほとりにて姿を見失うて候ふよ。
アイ「これは言語道断、不思議なる事を承り候ふものかな。それは疑ふところもなく、御息所にてござあらうずると存じ候。それをいかにと申すに、源氏この所へ詣でさせ給ひたるも、長月七日しかも今

二 この世に執心を残しておいでであるからか。
三 僧衣。「木蔭」「草」の縁語。「木蔭」と頭韻。
三 草が一面に生えて筵を敷いたようになっているところ。
四 「展のべて」に音が通じ、「草筵」の縁語。
▼〈車之伝〉の場合は、車の作り物を常座に出し、シテは車の内へ入って謡い出す。
五 「野」「秋」「千草」「花」は縁語。
六 「われ」の「わ」は「輪」に音が通じ「車」の縁語。「めぐり」も「車」の縁語。
七 「(月の光も)かすかなる」「かすかなる(車の音)」と上下に掛かる。

日に当りて候。ことさら御息所の御心中、おそろしき御方と承り候へば、御心を残し置かれたるか、またはいにしへをゆかしうおぼしめし、あらはれ給ひたると存じ候。くこの所に御逗留なされ、ありがたき御経をも御読誦あつて、御息所の御菩提を御弔ひあれかしと存じ候。

ワキ「しばらく逗留申し、ありがたき御経を読誦し、かの御跡をねんごろに弔ひ申さうずるにて候。

アイ「御用の事候はば、重ねて仰せ候へ。

ワキ「頼み候ふべし。

アイ「心得申して候。(狂言座へ行き、着座。やがて切戸口より退場する)

ワキは着座のまま〈上歌〉を謡う。

ワキ〈上歌〉片敷くや、森の木蔭の苔衣、森の木蔭の苔衣、同じ色なる草筵、思ひを述べて夜もすがら、かの御跡を弔ふとかや、かの御跡を弔ふとかや。

一 網代車。車体の両側や屋根に網代(細く薄く削った竹や檜などを斜めまたは縦横に編んだもの)を張った、牛車の一種。二 牛車の簾の内側にかけて垂らす絹布。その端を簾の下から外に出す。参考「網代のすこし馴れたるが、下簾のさまなどよしばめるに、いたうひき入りて、ほのかなる袖口、裳の裾、汗衫など、物の色いときよらにて、ことさらにやつれたるけはひしるく見ゆる車二つあり」(源氏物語・葵)。三 「簾」の縁

野宮

一 「声」の囃子で、後シテの六条の御息所が登場し、常座に立って謡い出す。地謡となると、シテは地謡に含わせて舞う。

〔一声〕

シテ〈野の宮の、秋の千草の花車、われも昔に、めぐり来にけり。

ワキ〈不思議やな月の光もかすかなる、車の音の近づく方を、夜もすがら僧は御息所を弔う。

旅僧〈衣の片袖を敷くのは、森の木陰の一面の苔の上、森の木陰で 苔色の僧衣のまま寝て、衣と同じ色の草の褥の上で、昔を思いつつ 夜一夜、かの御息所のお弔いをすることだ、御息所のお跡を弔うことである。

六条の御息所の亡霊が車に乗ってあらわれ、賀茂の祭の際に葵の上によって自分の車が押しやられてしまった身の無力を嘆き、妄執を晴らしてくれと願う。

御息所〈野宮の、秋のさまざまな花で飾られた車に乗り、わたくしも その昔の旧跡に、もどって来たのである。

旅僧〈ふしぎなこと 月の光もほのかな中に かすかな、車の音が近づいて来る そ

語。四・車屋本及び下掛三流は、今は疑ふところもなく。五賀茂の斎院御禊の日、見物に出かけた葵の上と六条御息所と、車を立てる場所について両者の下部が争い、御息所の車が押しのけられたことをさす（源氏物語・葵）。参考・北の方、そのころただならぬ御心地にてわづらはしくおはしませば、御心地慰めにとて、出でて御覧ずるに、また、源氏の通ひ給ふ六条の御息所も忍びて出で給ふ。車の立て所を御供と人々争ひて、御息所の御車をうち損ざしなどせしなり。車争ひ、これなり（源氏小鏡上・葵）。六・車屋本及び下掛三流は、主はそれぞと白露の。七「誰とも」知らず」と掛詞。一所狭きまで」の序。八源氏の正妻。その父左大臣は、源氏元服の際、加冠の役を勤めた。九供の者や随行者に賜わる牛車。参考・つひに御車ども立てつづけつれば、副車の奥に押しやられてものも見えず、心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるがいみじくくねたきこと限りなし。榻なども押し折られて、すずろなる車の筒にうちかけたれば、またなう人わろく、悔やしう、何に来つらんと思ふにかひなし（源氏物語・葵）。一〇「（物見車の）力もなき」「力もなき（身の程）」と上下に掛かり、物見に来たかいもないことと、葵の上に対抗する力のないこととの両意を持つ。一一「（身はなほ）牽し」と掛詞。「めぐり」

見れば網代の下簾、思ひかけざる有様なり。いかさま疑ふところもなく、御息所にてましますか、さもあれいかなる車やらん。

〈いかなる車と問はせ給へば、思ひ出でたりその昔、

〈賀茂の祭の車争ひ、主は誰とも白露の、

〈所狭きまで立て並ぶる、

〈物見車のさまざまに、殊に時めく葵の上の、

〈御車とて人を払ひ、立騒ぎたるそのなかに、

〈身は小車のやる方も、なしと答へて立て置きたる、

〈車の前後に、

〈ばつと寄りて（右を向き一歩出て見まわす）、

地謡〈上歌　人々幔に取り付きつつ（扇を開きつつ正面へ出て扇に左袖をかける）、人だまひの奥に押しやられて（たらたらと下がる）、物見車の力もなき、身の程ぞ思ひ知られたる（シオリをする）。よしや思へば何事も、報の罪によも漏れじ（角へ行く）、身はなほ牛の小車の、めぐりめぐり来ていつまでぞ（大小前へ行き小さくまわる）、妄執を晴らし給へや、妄執を晴

のほうを、見ると網代車に下簾、思いがけない光景である。さては疑うまでもないこと、御息所でいらっしゃいますか、それにしてもこれは どのような車なのだろうか。

御旦那〈どのような車かとお尋ねになったので、思い出したのは その昔の、〈賀茂の祭の折の車争いのこと。主はだれともわからないが、

御旦那〈あたり狭しとばかりに立て並べた、

御旦那〈祭見物の車がさまざまあるうち、とくに今を時めく葵の上の、

御旦那〈お車というので あたりの人を払いのけ、騒がしくしている そのただなかで、

御旦那〈わたくしのは小さな車だが（わが身分としては車を動かす必要はないと思って）車のやり場も、ないと答えて そのまま立てて置いた、

御旦那〈その車の前後に、

御旦那〈ばっと寄って来て、

御旦那〈葵の上の下部どもが 車の幔に取りついて、そのまま供車の奥に押しやられてしまい、見物に出たかいもないことで 無力な、わが身のほどが つくづくと思い知られたのであった。しかたがない

ここ　思えば何事も、前世の悪業の報い

の序。三 六道を輪廻して、の意。参考「無常は春の花盛り、林をかざる夕べの色、移ろひやすき匂ひの、嵐にしたがふのみならず、黄葉のもろき秋の梢、時雨にたへぬ別れも、生滅ともにはてしなく、その車のめぐるにことならず」（真曲抄・無常）。「流転無窮ニシテ車ノ庭ニ廻ルガ如シ、昇沈不定ニシテ鳥ノ林ニ遊ブニ似タリ」（六道講式）。「無始より我らは流転して、いつか生死を離るべし、六趣輪廻のありさまは、車のめぐるが如くなり」（地蔵和讃）。一三・車屋本及び下掛三流は「助け給へや」。繰り返しも同じ。一四・車屋本及び金春・喜多の二流は「昔に帰る」。一五 花と縁語。一六「袖を返す」と「昔を今に返す」との両意を持つ。一七 月影。一八「（影さびしくも）漏り」と掛詞。一九「露」の縁語。二〇 光源氏。二一「（誰）待つ」と掛詞。参考「風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、ましてわりなき御心まどひどもに、なかなかこともゆかぬにや」（源氏物語・賢木）。

一 参考「出でがてに、御手をとらへてやすらひ給へる、いみじうなつかし」（源氏物語・賢木）。なお、車屋本及び下掛三流は「あはれなり」。

▼（合掌留めどころ）の場合、〔破ノ舞〕を鳥居に合掌して留める。

二「伊勢」に掛かる枕詞。「かたじけらし給へや（ワキへ合掌する）。

シテは大小前で「昔を思ふ」と謡い、地謡となって常座へ行き、〔序ノ舞〕を舞う。常座で舞を留めて、〔ワカ〕を謡う。以下、掛合いの謡・地謡に合わせて舞い、続いて〔破ノ舞〕を舞う。大小前で舞を留める。

シテ　〽昔を思ふ、花の袖、

地謡　〽月にと返す、気色かな。

〔序ノ舞〕

シテ　〽（ワカ）野の宮の、月も昔や、思ふらん（上ゲ扇をする）。

地謡　〽影さびしくも、森の下露、森の下露（左右をして出る）。

シテ　〽身の置き所も、あはれ昔の、

地謡　〽庭のたたずまひ（正面へ出る）、

シテ　〽よそにぞ変る（見まわす）、

地謡　〽気色も仮なる、

シテ　〽小柴垣（作り物へ近寄る）、

地謡　〽露うち払ひ（扇で露を払う）、訪はれしわれも（少し下がる）、

シテ　その人も、ただ夢の世と（角へ行く）、古りゆく跡なるに、

地謡　誰松虫の音は（扇をかざして下を見る）、りんりんとして（大小をまぬかれることはあるまい。わが身は依然として つらい輪廻の境涯から抜けられず、めぐりめぐっていつまで 同じ苦しみを繰り返すのであろうか、この迷いの心を 晴らしてくださいませ、どうか迷いを晴らしてくださいませ。

昔を思いおこして御息所は舞を舞い、源氏の訪問を回想してなつかしむ。

御息所　〽昔を偲び、美しい花の袖を、

地謡　〽月に向かってひるがえして舞い 昔を今に返すような、様子である。

御息所は〔序ノ舞〕を舞う。

御息所　〽野宮に今照っている、月も 昔のことを、偲んでいるのだろうか。

地謡（御息所）〽月の光が さびしくも、漏れて映る 森の下露、森の下葉に置く露。

御息所　〽はかないわが身の置き所であった ここ野宮も、ああ 昔のままの、

地謡（御息所）〽庭の様子、

御息所　〽よそとは違っている、

地謡（御息所）〽ほんのかりそめに作られたように 見える、

御息所　〽小柴垣。

地謡（御息所）〽その露をはらって、訪われたわたくしも、お訪ねくださったあの方も、ただただ昔の夢と、時は過ぎていった その跡であるのに、だれを待つのか 松虫の音は、りんりんと聞こえ、風が茫々

なくも」と頭韻。三「伊勢の」を受けて、内宮・外宮の意。ここでは鳥居の内と外の意をも持つ。なお、野宮には、伊勢の神が祀られている。

▼「出で入る姿」で右足を入れる演出もある。

▼〈車之伝〉の場合は、〔序ノ舞〕の後に後見が車の作り物を二ノ松へ移し、シテは「生死の道を」と橋がかりへ行き、車に乗り、幕の方へ出て、三ノ松で留める。

四・車屋本及び金春・喜多の二流は「出で入る姿も」。

五 生まれては死に、死んでは生まれる、という六道に輪廻する迷いの世界にいる姿、それを、の意。六 苦悩の多い現世をたとえていう語。衆生の生死流転する迷いの世界である三界（欲界・色界・無色界）を、燃えつつある家にたとえたもの。「三界ハ安キコトナク、ナホ火宅ノ如シ」（法華経・譬喩品）。なお、「火宅の門を車に乗って出る」とは、同じく譬喩品に記されている「火宅にいる子どもたちを救い出すために、方便として、屋外に羊車・鹿車・牛車があると告げたところ、争って外へ出て来て、無事にのがれることができた」という寓話により、迷界を出て成仏すること。七・車屋本は「ノ〳〵」とあるから、「火宅の門をや出でぬらん」と繰り返すと思われる。金春・喜多の二流は「火宅」で留め、金剛流は「火宅の門を」で留める。なお、上掛二流は底本と同じ。

前へ行く）、風茫々たる（招キ扇をして正面へ出る）、野の宮の夜すがら（鳥居の内を見つめる）、なつかしや（シオリをしつつ下がる）。

〔破ノ舞〕

地謡に合わせて舞い、常座で留める。

地謡 へここはもとより（鳥居へ近寄る）、かたじけなくも、神風や伊勢の（柱を左手で握る）、内外の鳥居に、出で入る姿は（左足を鳥居の内へ入れる）、生死の道を、神は受けずや、思ふらんと（角へ行き、脇座前へまわる）、また車に、うち乗りて（扇をつまみ持って中央へ行き、足拍子を踏む）、火宅の門をや、出でぬらん、火宅の門（常座で正面を向いた後、留拍子を踏む）。

と吹く、野原 その中にある野宮の夜は、なんともなつかしいこと。

御息所は〔破ノ舞〕を舞う。

御息所は、依然として浮かび得ない身は神の意にも添わぬことだと述懐し、やがて車に乗って火宅の門を出て行く。

地謡（御息所） へここ野宮は もとより、かたじけないことにも、伊勢の神の、内宮外宮と同じ その鳥居の内外を、出たり入ったりする姿は、生死の道に迷うかと見え、そのような者を 神はご納受なさらぬ、お気持であろうかと、また車に、乗って出て行ったが、迷界の門を、出て 成仏したのであろうか、この迷いの世界の門を。

校注・訳者紹介

小山弘志（こやま　ひろし）
1921年、東京都出身。東京大学卒。中世文学専攻。東京大学・国文学研究資料館名誉教授。『狂言集上・下』（校注）『謡曲・狂言』（共編著）『岩波講座　能・狂言』（共編著）ほか。

佐藤健一郎（さとう　けんいちろう）
1936年、東京都出身。東京都立大学卒。武蔵野美術大学教授。主著『近世演劇の思想と伝統』（共著）『小絵馬』（共著）『図説日本の古典　能・狂言』（共編）『藁の力』（共著）ほか。

謡曲集①〈全二冊〉

新編日本古典文学全集　58

一九九七年五月二〇日　第一版第一刷発行

校注・訳者——小山弘志　佐藤健一郎
発行者——上野明雄
発行所——小学館
〒一〇一—〇一
東京都千代田区一ツ橋二—三—一
電話　編集　〇三—三二三〇—五一四一
制作　〇三—三二三〇—五三三三
販売　〇三—三二三〇—五七三九
振替口座　〇〇一八〇—一—二〇〇
印刷所——凸版印刷株式会社

©H.Koyama　K.Sato　1997

Printed in Japan　ISBN4-09-658058-9

R〈日本複写権センター委託出版物〉
・本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは著作権法上での例外を除き禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
・造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、乱丁、落丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。